

# オリンピック東京大会雑感

村田修子

学生時代に陸上競技やその他のスポーツに熱中し、陸上競技のコーチになりたい、という夢を持っていた私にとって、自分の国でオリンピックが開かれる、ということや、それを実際に見ることができるといのはこの上なくうれしくすばらしいことでした。

その為に、仕事が多くなるのもかえりみず、二年前から作られた準備委員会の委員のはしくれとなり、国の内外に宣伝するパンフレットを作ったりという仕事をしていました。はじめのんびりとしていた活動も、大会が近づくにつれて組織委員会へと改組され会合も多くなり、ふん困気も高まり、仕事への不安とあいまって、考えただけで身体中があつ

くなるような興奮を覚えました。

その反面一向に盛り上ってこない一般の空気が気がかりでなりませんでした。いったいどうなるのであろうか、前売切符の売行は上々ときいても、或る種類の人達だけなのではないかしら、外国から見物にきた人や、われわれ役員だけがわいわいひとりずもうをとっているようなことになるのではないかしら、と心配になるくらいでした。ところが日本人のくせなのでしょいか、いざ始まってみますと驚くほどの熱狂ぶりでした。その期間中に所要でのった自動車の運転手は「何か放送のある時間は全くお客がなくてあがつたりですよ」といい、商売の人たちも「その時間はお

客がこないのぢょうど都合がいい」というくらいでした。

## ○ えんの下の仕事

私の属した広報資料部はプログラムの製作が仕事でした。普通の会と違って、会期中の分をまとめて一冊のプロにするのではなく、一日単位のものですから、今日行なわれた予選の結果によって明日の組合わせをきめ、最終的には上訴審判の或る人のサインをもらって始めて明日のプロを組む、という仕事に取りかかるのです。印刷会社の油くさい一室にとじこもって人の名前、国の名前を一字ずつ読みあわせ、一つのプロについて三、四回ずつ校正をします。USA(米)とURS(ソ連)の国の略号などをまちがえたりするたびに、壁にべたべたと注意書やら覚え書が張りつけられ、雑然としてきます。そこへ棒高跳のようにならぬ立ち語気も荒々しくなりすまじい空気になってきます。今私が住んでいる世界とは全く違った世界に入った経験という

ものは、またと得られないものでした。好きな道とはいえ、朝から最終のすり上る午前二時まで、記録や活字と取り組んでいる委員の仕事は、華やかな競技の裏にかくれ余りにも地味なものでした。あんなに楽しみにしていた競技を見る機会も少なく、仕事の合間にテレビをかいま見るだけでも誰一人として不平もいわず、会社の人達ともなごやかに責任を果せたのは、オリンピックを成功させよう、という共通の目標に向っていたからでしょう。本場に尊いことでした。こういう仕事は私共のところばかりでなくコンパニオンという役目をした人の話しを聞きましたが、そこでも表に現われている事柄一つ一つの陰になみなみでない苦労、苦心が払われていました。いま特集写真を見ていると自分たちの仕事から考えて大会のその陰にあつたさまざまな事柄や、栄光に輝いている選手が、各国の競技者のピラミッドの頂点として資格を獲得して、これまでになつたその裏にあるその人の努力や、その他の選手の人々のことまで考えたりしてしまいます。

いつも夢のようなやわらかいふん囲気の中にいる私にとつては本当によい刺激でした。もう一つ、オリンピックがもたらしたうれしい経験をあげてみます。

### ○ 幼児とオリンピック

何があっても、幼児は社会とつながっている、と感じるのですが、今度ほどそれが表にはつきり出たことはありません。まず四方面から集まる聖火のニュースが盛んに伝えられるようになると、自分たちでくふうしたトーチやそれらしいものを手当り次第にかかげては走りまわる聖火ごっこが専らでした。十月三日に行なわれた開閉会式のリハーサルを何人かが見るに及んで一層聖火台などにもくふうがこらされ、本物らしく行なわれました。その頃から一般の関心も高まってきたようでしたが、競技が始まるにつれて、先ず第一に重量あげごっこがやられました。組板やダンボールでバーベルが作られ、その軽いバーベルをもっともらしく顔をしかめて持ち上げ、成功したところや、失敗したようすをや

り、競技が終ると周りを取りかこんでいた人たちが顔をほころばせて拍手をする、という光景は見えていて笑いを禁じ得ませんでした。

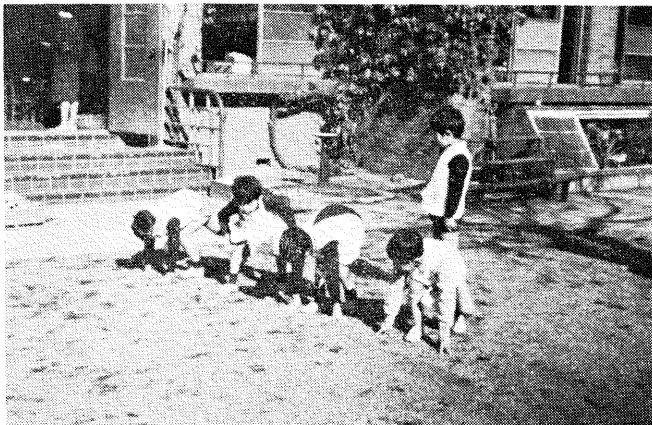


写真1 今まであまりみられなかったクラウチングスタートでかけごっこがはじまる

写真2 段を利用して1等2等の表彰式



テレビなどのまねにしても、綱引きや玉入れの時、勝った相手に拍手してそれをたたえてあげる、という、幼児には分らないだろうな”と思っながらやらせるそれとは違って、本当に身についた拍手でした。

五才児はそのまねる競技の中も広く、バドミントンでホッケーをやり、自分で画用紙に書いた旗を胸の前にセロテープではりつけ、うしろにナンバーをつけていつも日本対イギ

リスでバスケットボールをし、吊輪で体操のかけこをし、マットの上では泳ぎ、円盤投げのターンで足をきまょうに廻してはしりもちをつき、マラソンといつては庭中を走り廻って決勝点に入つてからは「体操をするんだよ」とエチオピアのアベベ選手がしたように整理運動をするなど、指導のホイントとなることまで自然につかみとつていたことは感心するほかはありませんでした。

また巾の広い競技のまねをしない四才児は専ら表彰式で、ビニールの組木のようなもので作った輪を首からかけ、まじめな顔で並んだり握手するのばかりやっています。その場では「おすもうのときの歌」といわれていた君が代がハミングでやられたり、全然ちがった場面でもはなうたまじりに歌われたり「○○ちゃんはこの歌好きなんですって」「あたしもすき

なの」などという会話も聞かれました。

教育要領で新しくとりあげ、いろいろと論議のあった国旗などのことについても、こうした生活に必然的にくつついた事象によって知らず知らずのうちに関心を持たれていることなど一般の人々の関心と共に、ちよつとやそつとでは得られぬたいへんな収獲だったと思います。

聖火が消え一か月たったこんにち残念なことにだんだんとそれらの話題も少なくなってきましたが、この一大行事はおとなになるまで幼児たちの心のどこかに忘れられないまままわれていることでしょう。また、そうあつてももらいたい、と念じながら、せめてその火を消さないように、と思つてへやに置いてある特集のグラフの前で「十七番だからアベベだ」「これ知っている。何の国の旗だ」と頁をめくっている幼児を見つめています。

\*  
\*  
\*  
\*